

\*\*\* 紹介 \*\*\*

杉浦 守邦 著

『カルテ拝見 文人の死因』

「武將の死因」と「文人の死因」について調べるのに大きな違いがいくつかあるという。武將の場合、本人が自分のことを書いたものはないが、他人がいろいろな形で書き残している。従って、平安時代の平清盛など古い時代からの武將の死因も追求できる。

しかし、文人の場合は、自分の事を自分で書き残さないと後世に残らない。そのため、病に伏すと自分の身辺については書き残さなくなる。従って、文人の研究は主に学問技法が勃興する江戸時代以降となる。しかも、庶民が字を習い、日記や手紙を書くことができる時代になって初めて資料が残る。

文人の死因追求には、江戸時代に文人が自ら書き残した日記や膨大な(?) 書簡が大きな手懸りになった。小林一茶や滝沢馬琴の日記、松尾芭蕉・与謝蕪村・小林一茶・近松門左衛門・賀茂真淵・本居宣長などの書簡がよい例という。

本書では芭蕉・加賀千代・蕪村・一茶の俳人四名、近松・山東京伝・馬琴の作家三名、真淵・宣長・塙保己一・頼山陽の学者四名、これらに詩人良寛・絵師安藤広重・医師緒方洪

庵の三名を加えた十四名について考察をしている。概して、「文人の死因」は武將にくらべて「心筋梗塞」など心臓病が多いという。

著者は付記して「一茶の妻菊の死因」という一項を設けている。文人でもない一茶の妻をわざわざ取り上げた理由を「死因分析に興味があった」「(一茶の日記類に) 菊の症状や闘病の模様が出て来る。それを追ってみると、当時の田舎における漢方治療がどんなものであったか、おぼろげながら浮かんでくるからである」と述べている。しかし、それだけでなく、著者が菊への憐憫と、妻菊と菊の産んだ子たちを不運な一生にした一茶への激しい憤りを感じていることも大きな理由ではないかと思う。

五十歳まで結婚しなかった一茶は梅毒に罹り、一茶のところに嫁入りしてきた二十八歳の菊に梅毒を感染させ、三十七歳で生涯を終わらせた。菊との間にできた四人の子はすべて二年と生きることができなかった。

一茶が尋常ではないのは日記に見られるという。結婚後、一茶は家に居つかず、妻の出産は全て妻の実家にまかせ、世間のつきあいも何もせず妻まかせ。子ができて世話するでなく、弟子の家に泊まり歩いていて家に寄り付かない。もともと虚弱で産まれた子が死ぬと妻の不注意として文章でなっている。

性欲旺盛な一茶は、家にいるときには「夜三交」「四交」「旦交(明け方の性交)」と妻との性交渉を日記に記している。四

一番目に産まれた乳飲み子金三郎を抱えて菊が倒れた時、一茶は湯田中温泉に入り浸り、ほとんど家に帰らなかつた。妻が重症になつてからようやく看病している。一茶は生半可に薬の知識があるので、自己流の治療をして、ほとんど医者の方診察を受けさせていない。

妻の病状が悪化すると、子を他人に預け、妻を妻の実家におしつけてしまう。妻が危篤になつても遠く離れた丸子に出かけてしまい、妻が死ぬ前日の夜中、妻の実家に戻つてきた。門人の妻が死んだときに、二首の和歌を詠んで、その死を弔つた一茶は、迷惑をかけた菊にはいたわる句も、弔う文も残していない。弟子たちが「一茶先生女房追善句会」を催したときも、妻を偲んだと思われる句を残さなかつたという。

著者は「あれだけ子供たちの死に際しては慟哭し、断腸の思いを吐いた一茶であるのに、この仕打ちはどうしたものか。十年間連れ添い、一茶のために尽くし、ついに犠牲となつた伴侶に対して自分勝手、あまりに薄情、冷淡ではないか。ただ子を産まず道具としてしか見ていないのではないかと、思いがする」と憤っている。

「一茶の俳人としての文学的功績を讃えるものは、同時にその影に埋もれた菊の犠牲的生涯に哀悼の涙を注がなければならぬ」と一面的な一茶研究に対する著者の批判は、蒙を啓かされる指摘と同時に、一八〇年後に捧げられた菊への哀悼の辞である。

(蔵方 宏昌)

〔東山書房、京都府京都市中京区西ノ京小堀池町八一二、電話〇七五一八四一一九二七八、二〇〇二年五月九日、B六判、三二〇頁、本体価格二〇〇〇円〕

藤田恒夫・牛木辰男 著

### 『カラー版・細胞紳士録』

この本は、新書版には珍しい多色刷りの現代細胞学の案内書である。一九五〇年代に筆者は、臨床医学教室から病理学教室へ数年留学した経験をもつが、その頃から五十年経た細胞学の進歩が本著作によって眼からウロコが落ちるように示されて有意義である。

まず目次をみると、はじめに、多様で多才な細胞たち」というタイトルで総論が述べられている。総論と書かないところに、この本の筆者たちのユニークさを感じる。

第一章とは書かない、「人体ビルの建築士」の章には、1.糸を吐く怪鳥・線維芽細胞、2.レース編みの名人・脂肪細胞、3.水のクツション・軟骨細胞、4.壁の中の活動家・骨細胞、5.よだれを垂らす巨象・破骨細胞、6.宝石づくりの魔術師・エナメル芽細胞、7.赤信号はみのがさない・象牙芽細胞、8.柔軟にスクラムを組む・水晶体の細胞、が紹介されている。この項目タイトルを見ただけでどれから読もうかという面白さである。このスタイルが講義の中にもちこまれているなら、学生は幸せである。筆者の学生時代は理